
P51-01 通所施設と通院施設のリハビリテーション連携介入による右上肢活動向上が見られた一症例

泉 真理恵¹、富田 昌吾¹、中田 大幸¹、原岡 由維¹、藤川 孝満²

¹特定非営利活動法人 寝屋川市民たすけあいの会、²佛教大学保健医療技術学部理学療法学科

【はじめに】今回、通所施設リハビリテーション担当者（以下通所リハ PT）とスタッフならびに通院施設リハビリテーション担当者（以下通院リハ PT）が、本人の意思に伴う上肢活動における情報共有および連携をとることで、上肢活動の向上が認められた患者について報告する。【症例】36歳女性。乳児期の急性脳症により、身体・知的ともに重度障害あり。発語による意思疎通は困難だが、以前から目の前の物や人に右手を伸ばすことがあった。【経過】通院リハ PT と特に上肢機能活動の情報共有を行い、同時に通所リハ PT とスタッフ間で本人の興味ある活動の情報を共有した。日々行いたい身体的運動を通所リハ PT からスタッフへ提案し、玩具の作成や遊びを検討・実施した。実施の様子は口頭ないし動画でスタッフと共有し、その都度玩具や遊びに改善を加えながら、1年半経過した。【結果】徐々に右上肢リーチスピード・正確性の向上が見られ、自発的に玩具のスイッチを押す等が見られた。【考察】通院リハ PT は身体機能を経年的に把握しており、スタッフは生活環境と本人の興味ある活動を把握していた。通所リハ PT はそれらの情報から継続可能な玩具や遊びを検討・提案し改善を繰り返したことが、今回の上肢活動向上につながったと考える。【今後の課題】日常生活における観察のため同一条件下で行えず客観視しにくいこと、実用的な意思疎通にまで至っていないことが挙げられる。